(S-019) GAVE IT ALL UP

これまでの人生でいろいろなことを止めて成長し、今では素晴らしい心持ちで暮らしているという話。スターの作品の中でとりわけリスナーを感動させるナンバーである。少なくとも私は歌詞に心を打たれた。

1番は学校へ上がる前のこと。LP アルバム MPF 1104 付属の歌詞カードでは武内邦愛が We gave it all up. We gave it all up for school. を 『そうさ何もかもあきらめたのさ 学校へ行くために』と訳している。しかし、就学は児童生活変化の目的ではありえない。原因である。私ならば「そんな遊びはしなくなった。学校へ行くようになったんだ」というような対訳にする。前置詞 for にもさまざまな用法があるのだ。

2番の話は少年時代の不良化。歌詞カードに『started lazing around』と記されている部分は、実際には started hanging around (ぶらつくようになった)である。その後の I gave it up for love. の意味が取り難い。「そんなことはきっぱりやめた。両親のことを想って」と解釈してよいのではないだろうか。「両親」の言及は決して唐突ではない。2番の冒頭は And my family had to move out of town. (僕たち家族は別の町へ引っ越ししなければならなくなった)である。

3番はガールフレンドを失った話。二番目のラインは、厳密には『She said she'd heard about the bad things I'd done』(僕が悪事を行ったことを聞いたと言った)ではなくて、She said she heard about the bad things I'd done.(僕が過去に悪事を行ったことを聞いていると言った)ではないかと思う。But one night she needed me and I wasn't there. は、多分、話者が他の女と浮気をしていたということ。すると、She gave me right up for love.(彼女は、本当の愛を求めて、僕と付き合うのをすっかりやめた)へスムーズにつながる。

ミドルの部分だが、Will I learn it in time? を『間にあう内に……』とする歌詞カードの対訳は in time の直訳の域を出ていない。「生きている間に」とか「死ぬ前に」とかしないと、日本語にならない。

4番末尾の I gave it all up for you. を和訳するのは難しい。歌詞カードのように

歌は、Mull of Kintyre. Oh, mist rolling in from the sea. で始まる繰返し部からスタートするが、その後半の対訳は正しくない。『僕はいつもキンタイアの岬に立つことを夢みてる』や『心はいつも帰っていく』では、話者が非現実の夢想をしていることになってしまう。 My desire is always to be here. が現実を表していることは、たとえ歌の背景を知らずとも、here という言葉から明らかだ。この文は「いつもここにいたい」とか「ここを離れたくない」という意味である。

1番。二番目のライン Dark distant mountains with valleys of green は、直前にある Far have I travelled and much have I seen. の事例。三番目のライン Past painted deserts, the sun sets on fire を正確に読むことができるリスナーは多くないかもしれない。直訳すると「彩色された砂の荒れ地を通り過ぎた所で、太陽が燃えながら沈む」。太陽が砂丘を赤く染めながら沈んで行く光景を、単に瞬間的に切り取るのではなく、時の経過と太陽の動きを踏まえて描写しているのが素晴らしい。なお、この部分は、前述のブックレットには『Past painted deserts, the sunset's on fire』と記されている。しかし、後述のように、次のラインで使われている代名詞がit ではなくて he であることに注目したい。

続く as he carries me home to the Mull of Kintyre における he は the sun の 擬人法。この節は「私がキンタイア岬にある家に帰る道すがらに」という意味であって、『懐かしい故郷キンタイアの岬へ帰りたい』とか『だが 心はいつも帰っていく』ではない。このナンバーは優れた詞があってこその歌なので、CD 付属の誤訳や拙訳に対しては、マッカートニー大ファンの著者としては溜息が出てしまう。"夢の旅人"という邦題も的外れ。

2番。 *like deer in the glen* に対する『谷間の上を漂えば』および『奥深い峡谷に立つと』という和訳も間違い。 *Sweep through the heather like deer in the glen* は、「谷間を駆けるシカのように、ヒースを払いのけながら進む」である。

Carry me back to the days I knew then は、ちょっと落ち着かない。主語が明らかでないからだ。「(そうしていると) 懐かしい過去の日々が思い出される」のように読むことになろう。そして、思い出として Nights when we sang like a heavenly choir of the life and the times of the Mull of Kintyre (キンタイア岬の暮らしや歴史などについての歌を、みんなで楽しく合唱した夜)が出てくる。

ともかく、"別れの時"とはなんとも無様な邦題。baby と honey という呼び掛け語が出てくるものの、話者がうんざりしている対象は女ではない。ビートルズの (Think For Yourself) が"嘘つき女"になってしまったように、このナンバーに関しても日本のレコード発売元の勉強不足が露呈している。

(M-116) WITH A LITTLE LUCK

シンセサイザーを多用したシンスポップ (テクノポップ)。邦題は"しあわせの予感"。白々しいほど楽観的な歌詞になっている。

1番。help it out(手助けをする)と lay it down(築く)における it は、文法上は this whole damn thing(この厄介なこと)を指すが、実体は不明。言い換えると、リスナーは自身の状況に当てはめることができる。 Can't you feel the town exploding? は、何かを成そうと各自が努力するならば、町中の人々の力は爆発的なものになる、と言っているのではないだろうか。

そのように読むと、There is no end to what we can do together. (僕たちが力を合わせてやれることに限界はない)へスムーズにつながる。その後の The willow turns his back on inclement weather. には要注意。TOCP-7858/TOCP-3131 付属の対訳は『柳は厳しい気候には背を向けてしまう』としているが、これは各語を単純に思い付きで直訳した結果の誤訳である。この対訳では歌の趣旨に合わない。正しい訳は「ヤナギは吹きすさぶ風に対して体をしならせる」。マッカートニーは、逆境に背を向けずに立ち向かうことを唱道しているのだ。

2番。clear it up は「かたづける」。We can bring it for a landing. は「着地へ持ってくることができる \Rightarrow うまく仕上げることができる」。そして turn it on は「妙技を見せる」という意味である。

3番の最初のラインは、CD のブックレットでは仮定法過去の文になっているが、 私には With a little push, we can set it off. (ちょっと押せば、始めることができる) という現実的な表現に聞こえる。続く We can send it rocketing skywards. (ロケットを空へ打ち上げるように、一直線で急上昇させることができる) も直説法現

1980年10月下旬、5年間にわたって子育てに専念していたと思われた(14ページ参照)ジョン・レノンの新譜が発表された。シングル〔(Just Like) Starting Over〕である。裏面はヨーコ・オノの〔Kiss Kiss Kiss〕。翌11月の中旬には、共同名義のアルバム DOUBLE FANTASY が発売された。構成はそれぞれのソロ作品が七つずつ。1972年の SOME TIME IN NEW YORK CITY に収録されたような共同作品はなかった。題名は、レノンが1980年夏にバミューダの植物園で見たフリージアの品種名に由来するとされている(ただし、Double Fantasy と呼ばれるフリージアの存在は疑問)。アルバム名としては、男と女の性的な夢想が重なっていることを言っている。

(L-069) (Just Like) **STARTING OVER**

50年代をほうふつするメロディーに乗る歌詞は、レノンが書いたものとしては面白みがない。安全で単純なのだ。CDアルバムTOCP-65528/TOCP-70907付属のブックレット(山本安見対訳)に載っている『それぞれ 新たな空へ飛び立つんだ』とか『一人きりで旅に出てみよう』というような、別れのメッセージという解釈もできるとしたら面白みが増すのだが、そのような読み方は成り立たない。レノンは、リラックスして、世間から離れて、二人だけの世界で関係を深めることを提唱しているにすぎない。あたかも(just like)やり直すかのように。

導入部末尾の Let's take a chance and fly away somewhere alone. は、『あえて 冒険してみないか それぞれ新たな空へ飛び立つんだ』という意味ではない。「(今の暮らしもいいけど) ふたりだけでどこかへ行ってみようよ」と言っているだけである。別行動を示す『それぞれ』は、ありえない。 alone と each は別物だ。

1番。It's been too long since we took the time. は、文脈から判断すると、「時間を割いてどこかへ行くなんて、もう長いことやってないね」という意味。仕事と子育てに追われてきた中年夫婦の会話にありそうな言葉だろう。

2 番では、『これ以上 時を無駄にはできない』という対訳が私には引っ掛かる。 Don't let another day go by は「先延ばしするのはやめようよ」と言っているだけ で、無駄な時間を過ごしているという思いが話者にあるとは感じられない。

(H-087) SAVE THE WORLD

〔Hong Kong Blues〕のカバーの後、SOMEWHERE IN ENGLAND の締め括りはこのナンバーだった。主題は反自然破壊で、邦題は"世界を救え"。

一つのラインを除いて、実に明解な歌詞なのだが、またしても WPCP-4383 の対 訳には異議を唱えざるをえない点がある。最初に、出だしから二つ目の文 *Someone else may want to use it.* は将来、地球に住む人のことを述べているのだ。「僕たち 以外に(環境や資源を)利用したい人がいるかもしれない」という意味。『また誰か が悪用しようとしている』ということではない。

その先の how we've abused it (どんなに僕たちが乱用してきたか)から、ハリソンが自身とリスナーにも責任があるという見方を取っていることが分かる。

唯一の難解なラインが、4番後半の The half-wit's answer to a need for cancer, death, destruction, greed だ。逐語訳すると「癌、死、破壊、強欲の必要性に対する愚か者の答」となるのだが、このような表面的な訳文ではハリソンの真意が伝わらない。need との押韻のために greed を無理やり使ったハリソンの落ち度もあるのだが。私が思うに、多分、「強欲な愚か者が進める策は、癌の発症、大勢の死、地球の破壊の原因となる」というように読むべきなのだろう。

WPCP-4383 の対訳に目を向けると、間奏後の三つ目のライン So far we've seen the big business of extinction bleed it. も和訳が難しそうなことが見て取れる。私の訳では「僕たちは、絶滅をもたらす大規模なビジネスが地球の活力を奪うのを見てきた \Rightarrow 大規模なビジネスが地球を破壊している」となる。

6番を構成する To end up on a happy note like trying to make concrete float is very simple knowing that God in your heart lives. (これをハッピーな歌で終わらせるには \Rightarrow こういったことをめでたく解決するには … 単に君たちが神を意識すればいいんだ)における like trying to make concrete float にも要注意。対訳では『確固たる床を築き』となっているが、私は「コンクリートを水に浮かせるように」という、不可能に思えることを可能にする努力の喩えだと考える。なお、ここで youを使うことによって、ハリソンは、神を信じずその創造物を破壊する人々を we と

1978 年 4 月発表のアルバム BAD BOY がまったくの不人気な結果に終わってから 2 年近くの間、リンゴ・スターに大きな動きはなかった。彼が再び脚光を浴びたのは映画界。コメディー CAVEMAN (邦題"おかしなおかしな石器人")の主役に抜擢され、1980 年 2~3 月にメキシコで撮影に臨んだ。そして共演のバーバラ・バック (Barbara Bach) とは実生活においても再婚へ進展。入籍は、米国で映画が封切られたのと同じ 1981 年 4 月だった。

CAVEMAN が編集と公開準備の段階にあった時、スターは新曲を少しずつ録音していた。その結果がアルバム STOP AND SMELL THE ROSES (邦題"バラの香りを")。1981 年 10 月に発表された(英日の発売は 11 月と 12 月)この LP に収録されていたのは 10 曲。9 曲が新曲で、スターが共作者としてクレジットされているものが二つ、ポール・マッカートニーの作品が二つ、そしてジョージ・ハリソンが書いたものが一つ含まれていた。

(M-159) PRIVATE PROPERTY

STOP AND SMELL THE ROSES のオープニング曲。マッカートニーの作品であるのみならず、制作、ミキシング、ベースとピアノの演奏も彼の手によるものだった。加えて、イントロのカウントとバッキング・ボーカルでマッカートニー夫妻の声も聞こえる。ギター奏者はウィングズのローレンス・ジューバー。

スターの声域と個性を考慮して書いたのだろうか。メロディーは単純で、歌詞もコミカルになっている。女の愛は独占するもの(Love monopoly, my philosophy)と信じる男が、自分の女を私有財産、私有地に喩えて歌う。No trespassing (立ち入り禁止)という表示は米国の至る所で目にするし、You get off the fence.(柵から離れていろ)は Keep off the grass (芝生に入るな)と同類の表現である。さらには Don't run off with it. (持ち逃げするな)に You'll be facing a charge. (告発されることになるぞ)というラインもあって、米国生活必須英語学習に役立つ歌だ。

(M-163) TUG OF WAR

LPに針を落として間もなく、What with one thing and another, it's a tug of war. というラインがスピーカーから聞こえてきて、私はなんだか嬉しかった。高校生の時に習った 〈what with A and (what with) B〉 (A やら B やらで) という言い回しに、15年くらい経ってやっと、ビートルズまたはビートルの作品中で出合ったからだ。このラインの意味は「あれやこれやで、人生は綱引きだ」。CP35-3001/TOCO-5992のブックレット(山本安見対訳)に書いてある『平均して』とか『一般的に』いうことではない。綱引きに喩えることができる要因や事例がいろいろあるということを言っている。

その次のラインは We expected more, but with one thing and another, we were trying to outdo each other in a tug of war. 。エンディングの前では、前述のブックレットでは『We were trying to outscore each other』となっているが、私の耳には We expected more, but with one thing and another, we would try and outscore each other in a tug of war. と聞こえる。いずれにしても、過去時制なのだ。綱引きのような対立構造の例としてマッカートニーの心に浮かんだ過去の出来事は何だろう? 私はジョン・レノンとの主導権争いではないかと思う。具体的には、どちらが書いた歌がシングル盤の A 面になるかという張り合いがあったことは、レノンも後年に認めていた。

ブックレットに記されている対訳は、In another world, we could stand on top of the mountain with our flag unfurled. についても正しくない。この could は、直説法過去時制ならば「できた」、仮定法過去ならば「できるだろうに」と言う意味であって、『できたはずだ』ではない。『できたはずだ』が当てはまるのは、must have been able もしくは could have である。それでは、問題の文の法はどちらなのか?私は仮定法と考える。「現状と異なり、人を出し抜こうとするようなことがない世界ならば、皆が一つの旗の下に高みを極めることができるだろうに」という意味になる。現実と理想の対比だ。

In a time to come, we will be dancing to the beat played on a different drum. も読み難いと感じるリスナーが少なくないだろう。私は「来たる時代には今とは違う考えの基に、一緒に躍動していることだろう」と読む。直説法になっているのは、

(H-096) GONE TROPPO

読者は、〔What's The New Mary Jane〕というビートルズ・ナンバーを知っているだろうか? 実験的、前衛的な作品で、ジョン・レノンが書いた歌詞は、文法や語法を無視したものだった。〔Gone Troppo〕の歌詞は、それと同じように、故意におかしな英文になっている。ハリソンの意図は何だったのだろう? 歌のタイトルの意味(熱帯ぼけで気が変になった)に合わせたのだろうか?

意図的に崩した文章なので、意味を取るのは難しくない。だが、CD の対訳には 間違えが目立つ。まず1番の *Night life, counting de fruit bat だ*が、数える対象は 『フルーツ』ではない。fruit bat とは「オオコウモリ」という動物である。呼称が 示すように、果実などを主食としているらしい。

2番の最初のライン Plant me, in de Heliconia についての『ヘリコン山に僕を植えてくれ』という対訳も疑問だ。私は「ヘリコニアの中に植えてくれ ⇒ ヘリコニアに囲まれて暮らしたい」という意味と考える。ヘリコニアは、南太平洋諸島などに生息する多年草。

3 番で、話者の居場所が判明する。オーストラリア・クイーンズランド州のモートン湾(Moreton Bay)を見渡せる土地だ。ギリシャのヘリコン山とは関係ない。

4番の *Brown skin and very a peeling だ*けは、意味がはっきりしない。茶色く焼けた皮膚がむける(peel)のは好ましいこととは思えないので、「茶色く焼けた肌が魅力的(appealing)」ということだろうか。

さて、題名と繰返し部にある $gone\ troppo\ だが、この肝心な言葉を\ CD\ の解説書は『トロッポに行くのさ』と誤訳している。<math>gone\ ta$ は『トロッポに行った \Rightarrow トロッポになった』が正しい訳である。仮に近接未来のことであれば、現在分詞を使った $going\ troppo\ となっていたはずだ。$

(M-177) PIPES OF PEACE

アルバム PIPES OF PEACE のオープニング曲。冒頭では戦場の光景が描かれているが、音響効果を用いず、あくまで楽器の演奏で表現しているのが評価できる。

導入部の歌詞は読み難い。後回しにしよう。

All 'round the world で始まる 1 番のテーマは、子供を大切にするということ。 Got to give them all we can 'til the war is won. おける the war は、国家間の武力 紛争とは考えられない。マッカートニーは戦争が起こること自体を問題にしている はずだからである。反戦闘争とか人種差別反対キャンペーンのような市民運動のことであろう。

次のラインは Help them to learn songs of joy instead of "Burn, baby! Burn!" と記述すると分かりやすいだろう。"Burn, baby! Burn!"(燃えろ燃えろ/燃やせ燃やせ)は、1965年のワッツ暴動におけるスローガン(ときの声)など、破壊活動のアジテーションである。この baby は呼び掛けであって、乳児のことではない。つまり、『赤ん坊を焼き払う代わりに』という CP35-3084/TOCP-3136の対訳は大間違い。「暴力行為をけしかけるのではなくて」というような意訳が当たる。

Let us show them how to play the pipes of peace. における pipe を『バグパイプ』と訳してはならない。単に「パイプ」である。なぜなら、ここは掛詞になっているからだ。ひとつは play the pipes (管楽器を演奏する)。もうひとつは smoke the pipe of peace (平和のキセルを吸う \Rightarrow 仲直りする)。和親の印としてキセルを回し飲みするという北米先住民の風習に由来する表現である。

2番の *Or will someone save this planet we're playing on?* は、あまり感心できない。主題が人類の調和から自然環境保護へシフトしてしまうような印象を与えてしまっている。 *Is it the only one?* は、I wonder if the planet isn't the only one for us. / It's the only planet for us, isn't it? (僕たちにとって唯一の惑星ではないだろうか) のことと読むべきだろう。そうでないと、他の天体へ移住すればよいことになってしまう。

問題にしているからだ。続く They're starving back in China. の後の So finish what you got. にはさまざまな読み方があるようだ。P33P 25044/POCP-1884の付属ブックレット(Kuni Takeuchi 訳)では、誰に向けての言葉のつもりか分からないが、『だからもういいかげんにしろよ』と和訳している。TOCP-65535/TOCP-70908/70919のブックレット(奥田祐士対訳)では『だからあるだけ食べ尽くせ』。私は、「だから(出された料理を)残さず食べなさい」と読む。これは、子をたしなめる親の台詞 Finish what you have. の引用ではないかと思うのだ。

リスナーは、*They're starving back in China.* とまったく同じラインが 1975 年発表の〔Move Over Ms. L〕にあったことを覚えているだろか? They're starving back in China. Boy, that's what they always said. (© 1974 Lenono Music)とい 文脈だった。最初の they は中国の人々だが、後の they は両親または養父母を指すと考えられる("ビートルズ・ソロ作品読解ガイド(2)" 105 ページ参照)。そして、このレコードの録音は 1974 年夏だった。これが、〔Nobody Told Me〕は新たな書きおろしではなかったという私の推量の根拠の一つである。

3番。Everybody's running and no one makes a move. の move (動き)とは、「措置を講じること」。その次のラインは、上記のブックレットには『Everyone's a winner and no one seems to lose』と記されていて、その対訳が載っている。幸いなことに、この記述は誤り。なぜ幸いなのかと言うと、これでは言い替えであるだけで、面白いパラドックスにならないからである。レノンはちゃんと洒落たラインで歌っている。それは、私の聴き取りによると、Everyone's a winner and nothing left to lose.(みんな勝者だから ⇒ みんなが勝ち取ってしまったから、失う物は何も残っていない)。

There's a little yellow idol to the north of Katmandu. というラインは、英国の詩人J・ミルトン・ヘイズの作品 THE GREEN EYE OF THE LITTLE YELLOW GOD の冒頭に似ていると言われている。その冒頭節は There's a one-eyed yellow idol to the north of Kathmandu. (カトマンズの北に片目になった黄色い神像がある)。エメラルドでできた目の片方が盗まれたという話だ。しかし、レノンはこの一節を思い出して何を連想したのだろう? 再び読者に問う。〔Nobody Loves You (When You're Down And Out)〕を聴き込んでいるだろうか? あの 1974 年のレノ

(L-079) I DON'T WANNA FACE IT

始めに題名をしっかり理解しておこう。「僕はそれに向き合いたくない」という逐語訳があてはまる。不安や臆病さが原因で「立ち向かいたくない」という意味なのか、それとも厭なことだから「直面したくない」のかは、文脈による。いずれにせよ、CD 付属ブックレットにある『とても見ちゃいられない』とか『見たくない』という対訳は当たらない。そして、レノンが語りかける相手 you は、レノン自身にほかならない。『この曲で「君」として皮肉っているのは[中略]ポール・マッカートニーという事なのだろうか?』などという TOCP-65535 の解説に惑わされないように。

1番。Say, you're looking for a place to go where nobody knows your name. You're looking for oblivion で歌っているのは、元ピートルとして扱われることへの不満。ところが、続く with one eye on the hall of fame (栄誉の殿堂にいくらか注意を払いつつ)からは、過去の栄光を断ち切れないという自己矛盾を自覚しているような印象も受ける。この点を取り立てて考慮しなければ、繰り返される I don't wanna face it は、スーパースターダムの地位を嫌っていることを言っているように読める。最後のライン Well, I can dish it out, but I just can't take it. の和訳は「そんなものは、くそくらえ。いらないよ」あたりが考えられる。このような心境は、DOUBLE FANTASY 収録の〔Watching The Wheels〕にも吐露していた。

2番。Say, you're looking for some peace and love. The leader of a big old band. You wanna save humanity, but it's people that you just can't stand. は、ビートルズのリーダーとして平和と愛を唱道し、人道主義者の自分が、その反面では人間嫌いに陥っていることを述べているようだ。私が抱く疑問は、どちらの気持が上回っているのか(いたのか)である。レノン自身にも分かっていなかったかもしれない。 I don't wanna face it を繰り返した後の Well, I can sing for my supper, but I just can't make it. は、「ちょっとしたことならできるけど、大きなことは無理」と解してよいのではないだろうか。5 年間にわたった隠遁の代価だ。このラインからは、レノンは何らかの活動に興味を持っていたが、自信がなかったように思える。

3番のテーマは精神修養のようなもの。 Well, now, you're looking for a world of truth, trying to find a better way. The time has come to see yourself (そろそろ